

島田正治

メキシコは、今雨期のまっただ中にある。雨は降るが日本の梅雨のような、しとしと雨ではない。降るときは雷鳴とともにどかっと終わる。この豪快さはよい。ここ十数年来、減る一方だったチャパラ湖の水が増えて、わたしがここへ住みはじめた頃の量に近くなった。湖岸がほぼ昔に戻ってきたのである。だから湖の風景が変わってきた。水の少ないチャパラ湖ほど悲しいことはない。描く側にとってもやはり満々と水をたたえた光景でありたい。気候も変化して、湖水の上を渡ってくる風もさわやかで涼しい。

住めば都とはよくいったもの、この八月で十九年目に入った。今のところ飽きることはない。まだまだ描き足りない。仕事にも不満が残る。ここへ住み始めたころ誰ひとりとして知ることはなかった。不安であったが生活を始めた。よくぞねばり抜いたと思う。いま一度、初心に戻って、そのころのことを思い出してみるのが大切である。その時の気持ちが甦る。

七月の終わりになって、ひとつ訃報があった。五十年來の名友、長坂吉和氏の死去である。わたしは東京へ出てきて大学の寮に入った。その寮生活で同じ部屋で暮らすようになった。共に学芸大学の書道科である。行年七十九歳、病名は心不全とあった。このメキシコへも何度か手紙をいただいた。いつかの便りで長年勤めた高校の教師を定年で止めて、書の実作生活に入り毎年一度個展を開き、三度つづけて少し体の調子を崩し、二度にわたって入院、以後気をつけているということだった。それでも執筆なども多く、そのコピーもときどき届けてくれた。

長坂さんから初めて会津八一や吉野秀雄のことなど教えてくれたのは、もう五十年以上も前。若き学生の長坂さんが初めて会津八一を訪ねるくだりは、学芸大の書道科の同窓会誌「雫」に投稿した「己之吉の語りひ」があるが、以後、会津八一研究に徹し、後年「会津八一、人と書」の本にまとめられた。この時、ゲラ刷り原稿を見せたくて、渋谷駅近くのホテルに小池邦夫と共に呼び出されて会いに行ったことがあった。吉野秀雄の病中を鎌倉の吉野邸を訪問して、熱い教えを乞うたりもした。

新潟の南蒲原郡中之島村の家を一度うかがったことがある。そして泊めてもらった。もう三十年近くなると思うが、そのころ、よく群馬の妙義山を描きに行ったのだが、正月を何日か過ぎたころ、上越線に乗って特急で高崎下車のところ、ついうとうとして乗り越してしまい、気がついた時には清水トンネルを出て、新潟に向かっていたのである。仕方ないので、そこで思いついたのが長岡の長坂さん宅を訪ねることにし、下車した。じつはこれしかじかと話して駅まで迎えにきてもらった。革靴姿のわたしを見て長坂さんは「雪国へ来るのにはこんな格好で来るものではない」と一喝された。そして住いの中之島村へ。そして家へ。玄関には作品を贈った額入りの「サンタプリスカ大寺院」の絵を飾ってくれていた。夜は二階の部屋に泊めてもらった。大きい氷柱がぶらさがっていた。

さて今回の最大の損傷を受けた水害で、全滅となった中之島町は床上浸水、泥の中に埋まった。この心労が長坂さんの体にこたえたのではないが、幸い二階の書斎の書籍、研究資料、書道用具に被害はなく、筆一本流しはしなかった。それにしてもこの世にすでに長坂さんはいない。冥福を祈るばかりである。

・・・次号につづく

ご意見・ご感想は
sum@arte-shimada.com
までお送りください。